



ズラリと並べられたサメのヒレ。
約1カ月間、天日干しにされ、加工後、あの高級食材「フカヒレ」になります。
宮城・気仙沼は日本一の水揚げ量を誇り、かつ加工技術の質も高いことで知られています。
震災後に落ち込んだ出荷量は、今年は回復しつつあり、
晴れ渡る空の下、最盛期らしい光景が広がっています。(2013年4月)

被災地と観光と復興

「被災地を訪問してみたいけど、今さら何が出来るわけでもないし、観光しに行ってもいいものかな？」先日、東京在住の支援者の方からこんな声を聞きました。

2011年3月11日の東日本大震災から2年以上が経過しましたが、被災地では、津波や地震で破壊された地域からの集団移転、建物やインフラの再建設、防潮堤や防災林の設置、震災遺構の保存、災害廃棄物の処理など重い課題が山積し、「観光」どころではない、という声もあります。

被災した地域の多くは、もともと普通の住宅地や漁村で観光地ではなく、よそから大勢の人が訪れることへの「とまどい」も根強く残っています。

他方、震災以前から進行していた地域の過疎化をくい止めるため、震災を機に地域の魅力を再発見し、内外からいかに人を呼び込むかが復興に向けた課題の一つとして注目されています。三陸地方独特の美しい景観、海や山の食彩、歴史的観光名所との地理的な関係、また震災を機にできたボランティアとのつながりなど、多様なリソースを組み合わせ、官民一体で地域の観光再生に取り組みすることで、5年後、10

年後も地域の活気を失わないよう、現段階で将来を見据えた観光再生計画の策定と実行が進められています。

すでに、津波で失われた商店や飲食店が新たな仮設商店街として次々に誕生し、賑わいを取り戻しています。また、ボランティアツアーや、運転手が震災の爪痕が残る場所へ案内し、当時の被災状況を説明する「かたりベタクシー」など震災の記憶を風化させないための試み、地元の食材や素材を使った商品の開発・販売など、多様な取り組みが実施されています。

そこには、「震災の記憶を忘れないでほしい」「もう一度素晴らしいまちを取り戻したい」といった思いが込められています。

まだ一度も訪れていない方も、すでに行ったことがある方も、今一度、復興に向けて前進する被災地に来て、復興の息吹を感じてください。

*

今月のマンスリーレポートでは、震災で甚大な被害を受けた宮城県気仙沼市が2012年3月から進めてきた気仙沼市観光戦略会議の成果と、会議の運営と戦略の策定をサポートしてきたシビックフォースの活動について紹介します。

Monthly Topic

Civic Force の複数の事業の中から、注目のトピックをお知らせします。

気仙沼市観光戦略会議で 戦略立案支援

シビックフォースの活動拠点である宮城県気仙沼市で、2013年3月末、1年前から毎月1回続けてきた「気仙沼市観光戦略会議」の締めくくりとなる10回目の戦略会議が開催されました。

地域内の観光関係者や外部のアドバイザーなど総勢24人の委員で構成されるこの観光戦略会議は、2011年10月に市が策定した「気仙沼市震災復興計画」の重点事項に挙げられた観光関連プロジェクトを具現化するためにスタート。食や地域文化を活用したメニュー、震災の経験や教訓、復興への過程を観光資源とする地域再生施策の創出などについて話し合ってきました。

そしてこの日、同会議が市長（写真右から二人目）に提示したのが「観光に関する戦略的方策」です。



二大戦略として「気仙沼ならではのオンリーワンコンテンツを活用した誘客戦略」と「水産業と観光産業の連携・融合による新たな付加価値創造戦略」を位置づけています。中長期復興支援事業の一つとして「観光再生プロジェクト」を掲げるシビックフォースは、同会議発足当初から、会議の運営を支えてきたほか、会議内に設置された5部会のうち、「コミュニケーション部会」などに参加し外部者の視点で観光誘客の環境づくりに向けた提案をしてきました。また、内外の専門企業と協力して観光戦略立案のための先進事例の調査・分析や重点戦略の提案を行ってきました。

観光事業実施に向けた プラットフォーム設立へ

今後は、この施策をいかに実現していくかが最大の課題となります。これらの施策を実現するために「三陸観光再生プラットフォーム（仮称）」が発足します。

観光振興に向けて重要な視点の一つは、観光業に従事する事業者だけでなく、市民や水産業者などが広く連携し、財源と機能を持つ組織が実効性のある体制をつくること。このプラットフォームは、各主体の取り組みと関係者間の連携をさまざまな角度から支援する場を設け、計画目標実現に向けた動きを加速させる役割を担います。

次の災害に備えて 三重と協力協定締結

次の災害に備えて自治体や企業との連携を進めるシビックフォースは、3月27日、三重県と「災害時における相互協力協定」を締結しました。協定では、災害発生時に迅速で効果的な被災者支援の実現を目指して、①災害時の情報収集及び伝達、②災害時における物資の調達、供給及び緊急輸送、③市町から要請があった場合の避難所等での被災者支

チャリティーイベントで 東北を応援

シビックフォースの東日本大震災支援活動は、多くの企業・個人の皆様に支えられています。震災から2年。皆様のあたたかい応援やユニークな支援の取り組みが被災地の元気につながっています。

フランス発のウエアブランド「イザベルマラン」が、3月1日〜31日、表参道ショップでチャリティーイベントを開催。オリジナルポーチを販売し、売上金の一部をご寄付いただきました。

また、現在、イザベルマランを含む約10の法人・個人の皆様が、お店のレジ横や受付、イベント会場などに募金箱を

設置し、東日本大震災支援に貢献いただいています。

現在、募金箱設置にご協力いただける場所を探しています。募金箱を通じた国内外の災害支援活動へのご協力をよろしくお願ひ致します。お問い合わせは、pr@civic-force.org。



イザベルマランのチャリティーイベントで発売されたオリジナルポーチ

援、④県が主催する防災訓練等への参加などの面で連携・協力していきます。

鈴木英敬知事（写真右）からは「東日本大震災直後から継続して被災地の支援にあたり続けていることに敬服している。多くの企業、組織と連携する能力を持つシビックフォースと災害支援協定を締結することには、大変心強い」と期待の声寄せられました。これに対し大西健丞代表理事（写真左）は、「三重県は地理的にも沿岸部が長く緊急時のロジスティ

クスについてしっかりと準備・勉強が必要。企業や自衛隊、米軍との連携を念頭に調整したい」と述べました。

自治体との協定は、静岡県袋井市、宮城県気仙沼市に続き三例目となり、都道府県では初の締結になります。



「夢を応援プロジェクト」奨学生からのメッセージ

東日本大震災で被災した東北3県の学生を、奨学金制度とサポートプログラムで応援する「夢を応援プロジェクト」。奨学生にはこの1年を振り返って「最も印象に残っていること」「学んだこと」「最も力を入れたこと」「来年チャレンジしたいこと」などをテーマに作文してもらいました。ここにその一部を紹介します（抜粋。2013年3月時点）。

恩師の遺志を継いで

今、「教師になりたい」という夢に向かってがんばっています。

突然の震災で家計が厳しくなり、大学進学も、夢の実現もあきらめかけていましたが、私の通う仙台商業高校の先生に「お前はぜったい先生になれ」と何度も言われ、考え直しました。

昨年、私の誕生日である7月1日、入院していたその先生がガンで亡くなりました。あのとき先生に言われたことを遺志として受け継ぎ、仙台商業高校の教壇に立つことが、先生への恩返しだと信じて、これからも努力していきます。

（高校3年生、宮城、男性）

山形の海

昨年、最も印象に残ったことは、夏に山形県の海で泳いだことです。それまでは宮城の海に行っていましたが、福島第一原発の影響で泳げなくなりました。また、父が釣り舟で魚を獲る仕事をしていましたが、放射性セシウムの影響で、宮城で仕事をするのが難しくなったため、将来、山形県に移住することを考えています。

いきなり知らないところに行くのは不安ですが、今回行った山形の海はすごくきれいで、有意義な時間となりました。

（高校1年生、福島、男性）

北海道の老人と文通

震災や避難所生活で感じたことを書いた作文が日本語大賞というコンクールで最優秀賞に選ばれ、新聞に掲載されました。あるとき、それを見た北海道の86歳のおじさんから手紙をもらい文通が始まりました。

そして、先日、ついにその方が陸前高田に来てくれたので、私が住んでいた町や家があった場所を案内しました。がれきをたくさん袋に詰めて帰っていく姿が印象的でした。私たちの文通は今も続いていて、手紙が届くたび、私は元気をもらっています。震災が起きたおかげ、というのはおかしいけれど、このような新しい出会いに感謝しています。

（高校1年生、岩手、男性）

周りの励ましに支えられて

震災の影響で福島市に引越したため、学校がある南相馬市までの約73キロを、片道約1時間半をかけて通学していました。毎朝早い時間に起きなければいけません。母は私よりも早く起きて私の弁当と朝食をつくり、運転して高校まで送り届けてくれました。

疲れたとき、辛いとき、先生や友だちの励ましに支えられてきました。「夢を応援基金」を薦めてくれた校長先生にも感謝しています。何のとりえもありませんが、唯一誇れることは「人運」に恵まれていること。これからは、養護教諭になる夢を叶えるためにがんばります。

（高校3年生、福島、女性）

中長期復興支援事業

Civic Forceでは、緊急時から約1年半にわたる支援活動の中で見えてきた被災地の課題解決に向けて、さらに腰を据えて取り組むため、2012年夏から「中長期復興支援事業」を続けています。各事業の進捗状況をご報告します。また、より分かりやすくお伝えするために各事業にプロジェクト名をつけました。http://www.civic-force.org/emergency/higashinohon/choki/

■観光再生プロジェクト

～“訪れたいまち”に向けた官民協働の仕組みづくり
詳細はP2をご覧ください。

■命をつなぐ翼プロジェクト

～ヘリを活用した緊急医療搬送支援

震災以前から医療過疎が進む沿岸被災地で、救急医療搬送用ヘリを導入し、高度医療機関へのアクセス改善を目指す事業。5月の事業開始に向けて、現在、ヘリポートとして利用できる土地や医療関係者との体制など最終調整中。

■緑の“環”プロジェクト ～持続可能な林業と木質バイオマス活用を通じて地域を活性化

木質バイオマスの利用を通じて持続的な社会の構築を目指すプログラムとして、気仙沼地域エネルギー開発株式会社など地元企業やNPOと協力。個人林業者の育成や木材集積場の運営、地域通貨の試験的利用をサポートしている。

NPO パートナー協働事業

地域の復興に取り組むNPOをサポートしています。2013年4月現在、4件の事業を実施中です。
http://www.civic-force.org/emergency/higashinohon/npo/

■共“還”まちづくりプロジェクト

～地域発・住まいとしごとの創造的復興チャレンジ支援
被災地で生まれたNPOや被災地行政と協力し、すでに集団移転を決めた地域で始まっている新しいまちづくりのサポートや、これからまちづくりを進めていく地域で、専門家派遣や人材育成などのプログラムを支援。

■夢を応援プロジェクト

～奨学金 × 地域発の教育プログラムで若者サポート
東日本大震災で経済状況が急変または悪化し、就学継続が困難な状況にある被災地の高校生が社会人になるまでの最長7年間、奨学金を給付するとともに、被災地内外での教育プログラムなどを実施。

東北支援
NOW

『チーム大西WEB』 オープン！

大西健丞の公式ホームページ『チーム大西WEBサイト』がオープンしました。これは、シビックフォースおよび「アジアパシフィックアライアンス」、「ピースウィンズ・ジャパン」などの組織を立ち上げた大西のビジョンの全体像を明確にするため、制作されました。スタジオジブリの鈴木敏夫プロデューサーや経団連・金原主席国際経済本部長からのメッセージも掲載されています。
<http://www.onishi-kensuke.net/>

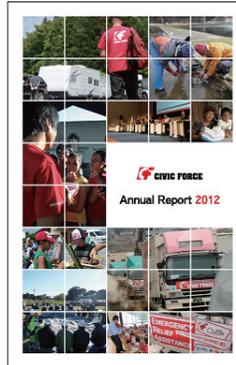


Team Onishi



シビックフォースの 1年が目で見える

2012年度（2011年9月～2012年8月末）の年次報告書をHP上で公開しています。「一読いただき、「意見・」感想をお寄せください。」



<http://www.civic-force.org/news/news-1034.php>

「次への備え」は 企業の皆様とともに

シビックフォースでは現在、次の大規模災害発生に備え、平時からより多様な企業や団体との連携関係の構築に努めています。その活動の多くは法人賛助会員の皆様に支えられています。多くの企業様の参加をお待ちしています。
<http://www.civic-force.org/about/membership/>

1日33円からできること

平時から備えておくために、皆様の力が必要です。マンスリーサポーターとして、毎月定額（1000円単位）をご寄付い

ただく形で、大規模災害への備えの活動に参加してください。

■ 銀行：三井住友銀行 青山支店 普通 6953964

■ ゆうちょ：00140-6-361805

（上記いずれも口座名義は「ロウキンギョウケンジン シビックフォース」です）

■ クレジットカード：ホームページ「オンライン募金」をクリックしてください。

https://bokinhaz2.com/civicforce/donation/bokin/page1.php?bokin_type=donation

1日1回1クリック

「クリック募金」は、「クリック1回」で募金できる仕組みです。皆様の協力をお願いいたします。

<http://www.clickbokin.ekokoro.jp/139.html>

<http://www.psc-inc.co.jp/clickdonation/index.html>



CHECK!

被災地からのメッセージ

震災から2年。このコーナーでは、被災した東北で暮らす方々の声を届けます。今回は、宮城県気仙沼市内でエステサロン「美salon MM」に勤務する森谷直子さんにお話を聞きました。



気仙沼市
美salon MM 森谷さん

—— 家族3人で住んでいた家が津波で流されたため、高台の嫁ぎ先へ移り、今に至ります。震災発生後、SNSやラジオ局を通じて物資提供の呼びかけと配給に回りました。なんらかの理由で避難所に入ることができない『見えない被災者』が気仙沼には溢れていて、そういった人たちの所にも車で配給に回りました。

自分も被災しましたがそれでも支援する側に回ろうと思ったのは、みんなに元気になって希望を持ってほしかったから。たくさん被災者が私と同じ思いを持って支援活動を行っているのを見て『自分だけじゃないんだ』と強い気持ちになれました。県外から助けに来てくれた人たちとつながることもできました。

今回、初めて支援を受ける側に立って、みなさんの温かいご支援に頭が下がります。みなさんに生かされているんだという思いです。直接一人一人にお礼を言うことはできませんが、この場をお借りして御礼申し上げます。